

# 人形のモチーフに見るレズビアン精神主体の 誤認と葛藤——ホール『寂しさの泉』

林 美 里

Radclyffe Hall の *The Well of Loneliness* (1928) は、イギリス文学史上初めてレズビアン恋愛表現を全面に押し出した作品として知られている。その作品における主人公 Stephen Gordon の性格付けは、先天的レズビアンを象徴する、それまでその存在が認知されていない一般の読者層に向けて、極めて明確に表され、この作品が「ラドクリフ裁判」にかけられ、発禁処分に至る一大センセーションをもたらした後も、Stephen Gordon のシルエットはしばらくレズビアンアイコンとして多くの人の胸に刻まれることになる。

レズビアン・アイコンとして描かれる Stephen Gordon は、その定義を今まで知らない者にとって多くの違和感、そして恐怖を与えた。それは彼女の両親、Sir Philip Gordon と Lady Anna Gordon も例外ではない。彼らのいささか熱心の度が過ぎる胎児への期待は、男子が生まれてくるはずだったのに、女子だったという運命の皮肉の結果とともに、大きく裏切られる。その後の子供への態度の変化は、2人が初めて子供を持ち家族を構築するにあたり、描いていた若き理想の非現実さに対する悔恨の表れのようにとらえられてならない。

今回はまずこの両親2人を取りあげる。物語の序盤を中心に誕生と言う時点に焦点を当て、彼らが胎児に思い描いていた幻想の崩壊と、その後の子供への愛情の変化の様から、彼らの胎児への愛が果たしてどのような概念から成り立っていたものか、次に、愛を受け止める側に立つ主人公

Stephen にとってどういったものであったか、作品序章に類出する「人形」のモチーフと併せて考察していきたい。

この作品において両親の詳細の記述は、主人公 Stephen が生まれ故郷の Morton を去る作品の前半に主に集中する。特に本人が自らの意思を持つ前の誕生前から幼少期が描かれる第 1 章から第 5 章の箇所は子供の意思および行動をある程度操作できる時期で、その分、両親の意思が色濃く文中に反映されている。まず始めに両親 2 人それぞれの個性をみてみよう。

Stephen の父親 Sir Philip Gordon は、作品の中で、学者的で、夢想家な人間と表されている。若いころの放蕩生活の末、妻の Anna と運命的な出会いをし、結婚してから 10 年後、ようやく妻のお腹に生命が宿る。この時、その彼の夢見がちな性格が家庭内を揺さぶる発端となる。彼は妻の間にようやく宿った命に都合よく自分の中の完全性の理論を当てはめようとした。その理論として最初に条件付けられたのが、彼の場合、不思議なことに、生まれ出る子供が男児であることだった。“Sir Phillip never known how much he longed for a son until, some ten years after marriage, his wife conceived a child; then he knew that this thing meant complete fulfillment, the fulfillment for which they had both been waiting” (8). 彼はなぜここで男児のいる家庭イコール完全な家族という図式を思い描いたのだろうか。その考察は後述することにして一方、妻の Anna をみてみよう。妻 Anna は Hall の作品において、完全な女性の象徴的存在として描かれる。“She was lovely as only an Irish woman can be, having that in her bearing that betokened quite pride, having that in her eyes that betokened great loving, having that in her body that betokened happy promise — the archetype of the very perfect woman, whom creating God has found good” (7). ここで“happy promise”と記述のあるように、Sir Philip にとって、完全な女性は将来の幸福を約束、保証してくれる存在だった。放蕩の生活を続けるうちにたどり着いたのがアイルランドの Country Clare、彼はそこで出会っ

たアイルランド特有の美貌を持ち合わせた Anna の中に、あたかも「羽ばたき疲れた小鳥が巣を目指して飛んでゆくように」安住の地を見出し、自分の旅の終わりを悟る (7)。この *The Well* の作品内で興味深い点は、Hall が時折このように「女性 = 地理的位置」の感覚で描いている箇所にある。その別の例に、物語の書き出し部分があるが、まず舞台の場となる Morton 邸を紹介する際、Hall はそんな理想の女性に家を比喻して表現する箇所がある。“It is indeed like certain lovely women who, now old, belong to a bygone generation — women who in youth were passionate but seemly; difficult to win but when won, all-fulfilling” (7)。ここでも Hall は、「理想の家」を「理想の女性」としてなぞらえ、得がたきものであるが、いったん手にすれば “all-fulfilling” をもたらすものとして Morton 邸の素晴らしさを称えている。つまり、Hall は作品を通して女性というのは、「人間の家」や「小鳥の巣」などに象徴される何らかの精神的器としての媒体であるという彼女なりの概念を示唆しているのである。

ではここで、彼はなぜ男児のいる家庭イコール完全な家族という図式を思い描いたのか、という先ほどの問いかけについて考察してみよう。上流階級の家庭において、世襲制の都合上世継ぎの対象となる男児が必須であることはもちろん言うまでもないことであるが、彼の場合は、それに付け加えて、完全性という理想を男児に寄せていた。その理由に、Hall の女性を精神的器の媒体としてみる概念があるとして考えてみる。

彼にとって、すでに精神的器は物語の中では既に二つ獲得していた。それは前述した Morton 邸、そして最愛の妻 Anna。Sir Philip は、素晴らしい器よりも中に納めるための、更に求めるべきものはその器に見合った立派な核が絶対的条件であるという、仮定の理論を携えることになった。子供を迎えるに当たって、彼はそれまでの夫として夫婦間の優位性に付け加えて、さらに、父親として家庭全体を牛耳ることのできる、より確固とした優位性を保証された。それによって彼は気持ちの高揚とともに、それまで無意識内に潜んでいた彼のある側面が露骨になったと推測する。子供

が誕生するまでの瞬間、彼は突如エゴイスティックな神になった。最愛の妻の彼の行き過ぎた確信に対する懸念を無視し、男性の洗礼名を未だ生まれぬ子供に定めた。それも、今まであまり熱心な信者でなかった彼は、聖書を文学的に見て楽しんでいたように、あくまで彼の空想の延長線で洗礼名を発想した。この主人公の名前が作品を象徴するところは大きい。Hall が最初 *The Well of Loneliness* というタイトルの小説を書く前の 1927 年、彼女はすでにこの作品のもととなる小説を 27 章書き溜めて、最初その小説には *Stephen* というタイトルがつけられていた。“During the summer of 1927 John and Una returned to Bagnoles and Paris, saw Natalie and Colette, while John collected more material. She had now written twenty-seven chapters of Stephen which by November had become *The Well of Loneliness* — a title which, as Lovat Dickson says, was ‘another of Una’s inspirations’” (Cline 234). この *The Well* が執筆される前の 1916 年に発行された Joyce の *A Portrait of the Artist as a Young Man* の主人公は Stephen Dedalus の名前と偶然にも一致している。Joyce はこの作品内において積極的に象徴主義を取り入れているが、その主人公の名前、Stephen Dedalus にこめられたのは、まずキリスト教最初の殉教者である Saint Stephen、そしてギリシア伝説の工人の元祖ダエダロス。つまり、この名前の組み合わせによって、カトリックと芸術家の 2 つのアイデンティティの中で葛藤する様を象徴している。*The Well* に戻って、Stephen Gordon をみると、スコットランドの有名な軍人 Alexander Gordon のあたりからとられたものと仮定したら、*The Well* 内の世界大戦の時期の章に生き生きと活躍する血の色濃い彼女と、性倒錯者として茨の道を進む彼女の姿を思い描かないだろうか。父の Sir Philip は文学として愛する聖書から逸話をとってその名前を子供に贈った。しかし実際はわざわざキリスト生誕前のクリスマスイブの日に、親の予想を大きく裏切る形で彼女はこの世に生まれた。誕生の瞬間から、物語の終わりまで、彼女は Stephen Dedalus と同様、自分の中の男性と女性、2 つのアイデンティティと葛藤することに

なる、その運命を暗示した名前をつけた Philip。それが神に対する彼の最も大きな罪であったのは想像に難くない。彼はその後倒れた木の下敷きになって比較的短い一生を終えるまで、ずっとその咎を償っていくのである。

父 Sir Philip の女性に対する感覚が器のような精神的媒体であったと先に述べたが、今度はその器というモチーフについて考えていきたい。親のエゴを反映させる器である、まだ自分の意思を持たない子供の Stephen に、ここではあえて「人形」というモチーフを照らし合わせて考察する。

『脱人形論』にて人形と人間の違いを述べる KUJO 氏によれば、「一般化された人間関係に於いて、他者からの認識というのは多かれ少なかれ固定的な属性賦与を伴うもの」であり、「賦与された属性は精神主体の本来的な在り方と食い違いをみせるのが常である」。つまり、個性の認識はその中の精神主体そのものによるものでなく、その主体の反映する外見から客観的に推察されているのである。よって、その精神的主体の存在しない外見だけの人形を見る時、人は逆に外見の印象からその精神主体を、見ている側の人間が持っている精神主体のパターンを参考にしつつ仮定しているのである。これが自分を反映する鏡と人形が言われているゆえんである。では自我を持つ前の幼い子供を人形と同じ位置に仮に置いてみるとして、その子供の絶対的支配権を握る親の立場から見たら、どのようなことが生じらるだろうか。あれほど硬く信じ込んでいた男児の期待が見事裏切られた形で生まれた Stephen に両親はそれぞれの違和感を抱く。

まず母の Anna は夫の期待を裏切ってしまったことに後ろめたさを感じつつわが子を育てた。Stephen が完全に赤ん坊なうちはそれでも後悔だけでよかった。やがて少しずつ Stephen の自我が芽生えてくるところになると、そのあまりにも夫に似ている風貌と性分を持ち合わせた Stephen に不思議にも怒りがわいてくるという。“She would think: I ought to be proud of the likeness, proud and happy and glad when I see it! Then back would come flooding that queer antagonism that amounted almost to

anger” (11). Anna にはまず、Stephen が最愛の夫のような外見を持っていながらも、その外見の中にある精神主体はジェンダー的には女性に分類されているという認識がある。それだけでも彼女を混乱させるのに十分なのに、さらにそのはじめに認識した Stephen の精神主体は、実は性的倒錯傾向があり男性の側に偏っている不条理な点があった。その結果、Anna は二重に裏切られているのである。本来親の意思のまま、自在に愛情を投入できる媒体である幼少期の子供ですら素直に愛せないのは、Stephen に備わる、永遠に理解できない壁が彼女の前にあり、ゆえにそれに恐怖を抱いているからである。Anna は子供の中に素直に自己を見出すことができなかった。それが彼女に Stephen をわが子として認識することを拒絶させていた。

父 Philip の場合はどうだろう。彼は Stephen の誕生から自分の過度な男児への期待が過ちであったことを悟った。彼はその結果、彼女に対して憐憫の情を抱くことはあっても愛情を抱くことはできなくなった。

もし最初生まれる子供が男児だった場合、彼は何を期待しただろう。自分と同様、立派な男性に成長してほしい願いで、自分のプロトタイプとしてわが子を自己の再構築の実験台とするほどにエゴイスティックな側面を垣間見せただろうか。しかし生まれた子供は女子、自分のプロトタイプになりえる資格を彼の定義においては根本的に持ち合わせていなかった。彼には彼女を自然に受け入れることはどうしてもできなかった。

その結果、Sir. Philip はどのようにして生まれてくる予定のなかったわが子と折り合いをつけようとしたか。彼は Stephen への認識の曲解によって折り合いをつけようとした。彼はまず自分が実際に感じた、彼女の精神主体の外見的印象から Stephen の個性を定義付けることを拒絶した。そして始めから自分の中で勝手に作り上げていた子供に対する認識の枠を赤ん坊でまだ自我の芽生えていない Stephen に押し当てたのである。具体的例を挙げると、彼は生まれる前から決めていた名前を取り下げようとしなかったシーンが一番印象深い。“He insisted on calling the infant

Stephen, nay more, he would have it baptized by that name. ‘We’ve called her Stephen so long,’ he told Anna, ‘that I really can’t see why we shouldn’t go on —’ Anna felt doubtful, but Sir Philip was stubborn, as he could be at times over whims” (9). ここで念を押すのだが、彼は子供が生まれる前の自分の思い込みの過ちについては Stephen 誕生直後きちんと認め、始めから子供の中に自己を投影できない、してはいけないことは理解していた。

ただ、妻の Anna が Stephen を女性として育てるようになり、夫である立場からそれを認めるまでの短い期間、彼はそのことを忘れるつもりだった。Stephen のそのあまりにも Philip に似た容姿性格から、自我の目覚めない、まだ自意識的に男女の性差が意識されない一瞬の間、父が Stephen を自分のプロトタイプとして素直に愛情を注ぐことが可能だったのである。それはあたかも本当に素直に父が娘の誕生を喜んでいるかのようだった。妻の Anna はそれに対して、自分の中でどこか拒絶反応を示してしまう我が子と夫に対して罪悪を感じる。彼は、事を荒立てないための配慮で妻に本当のことを告白し、説明するのを放棄した。しかし家庭の中にはそれでもどこことなく納まりきれない空気が流れていて、特に女の子を産んだことで困惑している様子の妻と、全ての元凶である娘に、憐憫を抱いていた。

また Stephen が成長して、彼女のジェンダー意識がどうも他人とは異なっていることに父が徐々に気がつき始めた時も、彼は別の観点から哀れみを抱いていた。もともと学者的気質だった Philip は真っ先に最新の学術的研究にその問題の客観的判断を求める。彼はそのうち、優生学の分野の書物、Richard Freiherr von Krafft-Ebing に筆答する優生学者の見解に出合う。娘 Stephen の同性愛の性癖は先天性のもので、修正することは不可能であった。彼はここで漸く自分の仮のプロトタイプに対する実験期間に別れを告げ、Stephen の誕生前に自分が彼女に対して行き過ぎた期待を持ったことが本格的に罪であったことを悟るのである。

ここで改めて今回の論点のキーワードである「人形」に戻って考えてみよう。人形の役割については先に述べたとおり、次に人形というモチーフが社会的通念に示す記号的役割について考えてみたい。昔から社会的風習やマナーを教えるためのツールであった人形は、大人が子供に与えるものだった。ゆえにその人形は教育的なものであり、ある意味、何も知らない奔放な子供に社会概念を視覚的に押し付けた強制的なツールでもあった。興味深いことに人形の持つ外見は、その人形が作り出される時代によって、大きく変化している。時代は異なるが、その例をバービーで挙げてみよう。アメリカにとって栄光の 50 年代、そのもっとも華やかな時代に生み出され、少女の憧れとなって、今でも中ですうっと愛されている着せ替え人形の代表、バービーについて、小谷氏が以下のような解説をしている。

第二次世界大戦という非常時には、国家的政策として社会に出て男波に働き戦争に参加するのは当然とされつつ、いざ戦争が終わると主婦になるのが当然と思われ、囲い込まれてしまったアメリカの女たちの 50 年代。輝けるアメリカの裏側で鬱積する女性の怨念がたまりにたまり、それがいずれベティ・フリーダンのプロパガンダをはけ口として噴出す以前に、家庭の主婦たちから娘たちへと、自立した大人の越すプレ人形のバービー人形が手渡されていく風景を思い浮かべてみよう。多くの少女の購買意欲をそそったバービーは、主婦というロールではなく、どちらかという、いろんな制服を身につける自立思考が強いお人形だった。(121)

一度社会に出て自立の喜びを知った女性は、再び囲い込まれた悲しみを、その今までの人形の中にダブル・スタンダードを髣髴とさせるもう一つの理想像を織り込ませた。社会的抑圧によって語る口を持つことをいまだ禁じられていた 50 年代女性にとって、母親から娘に対する無言の教育ツールであった人形は、歓迎されながら受け入れられ、新しい社会的思考を次の世を担う少女の意識に植え付けていったのだ。

残念ながら、このような考え方を持つようになるのは、実際に救急隊の運転手としてフランスへ凱旋した Stephen の世代からであった。いまだ

Stephen の生まれた時代の上流階級には古典的な夫に尽くしつつ、寄生して生きてゆく保守的な考えが当たり前としてはびこっていた。当然、この場合の人形は、よくある社会的通念どおり、「一見華やかだけれど、頭は空っぽ」を具現化したような上品な人形であったことは想像に難くない。前章で紹介した、Joyce が主人公の名前など、*A Portrait of the Artist as a Young Man* において多く取り入れた象徴主義に、Hall がもし、賛同して同じように習っていたとしたら、ここで登場する人形に、Hall は娘の将来に対する母親の理想を象徴させていたのだと考えられる。

幼い Stephen が持ち前の癪癢を爆発させていた時、こんな風に怒りの矛先を人形におつけるシーンがある。“In a quick fit of anger she would go to the cupboard, and getting out her dolls would begin to torment them. She had always despised the idiotic creatures which, however, arrived with each Christmas and birthday. ‘I hate you! I hate you! I hate you!’ she would mutter, thumping their innocuous faces” (17). この文章にあるように、Stephen のところには自分の誕生日兼クリスマスにかならず新しい人形が届けられていた。当時まだ無意識であっても、性的倒錯者である彼女にとって存在すら認められない社会の概念的象徴が定期的に送りつけられることは、思わず子供心に癪癢を起こさずにはいられないほどのプレッシャーだったということが読み取れる。

この「人形」の象徴する「華やかで虚ろなイメージ」はその後、様々なものに継承される。まず、物心つきだした Stephen に押し着せられた女性らしさ、例えば長い髪の毛や白いドレスなど女性らしさにまつわるものである：

Arrived in the nursery she would probably be cross, because her heart felt very empty and tearful; or because, having looked at herself in the glass, she had decided that she loathed her abundant long hair... If she spoke at such times it was usually to threaten: “I shall cut all my hair off, you see if I don’t!” or, “I hate this white dress and I’m going to burn it — it makes me feel idiotic!” (33)

これらのアイテムに異常なまでに嫌悪感を示すのは、単に行動範囲が狭められるから邪魔であるという理由だけでなく、それらの象徴する女性の保守性が、自我を封じ込める枷と感じたためである。自己を遮る者に関して、彼女はこのエピソードからも激しい感情を持って牙を剥く。しかし、これらのアイテムと Stephen の自我との戦いは、無機質で彼女の住む Morton 邸という限られた領域内においては圧倒的に優位を保つことができた。しかし、成長して新たな強制がしかれるようになると、今までのように優位を保つことができなくなった。

それまで彼女にまつわる問題は全て Morton 邸という守られた敷地内において起こったものだったが、彼女は友人として紹介された Antrims 家の Roger と Violet との交流を強いられることになった時、別の大きなショックを受けることになる。Morton 邸という自分の世界から、初めての他所の社会を経験した衝撃。交流先の Antriums 家は、あまりに男女間の普遍的な性差別の感覚が、公然と保守的に根付いていたのである。

ここでは Antriums 兄妹の妹 Violet を見てみよう。彼女は単に女性のステロタイプの型にはめられていた受け身的な姿勢ともう一方、幼い頃から、そのジェンダーのステロタイプの社会的構造を把握し、それに乗っ取って自分の有利なように行きていく術をいやらしくも要領よく得ていた。この際、重要なのは実際のお手並みよりも、それを装っていることだ。女の子らしく編み物をしている様子なども描かれるが、彼女の手から出来上がりつつあるそれは、どうみても “anything but knots” なものであったようである (Hall 4)。ただ、その行為そのものは大人から社会的見解から見ても、大いに賞賛されるものであった。“Violet was already full of feminine poses; she loved dolls, but not quite so much as she pretended. People said: ‘Look at Violet, she’s like a little mother; it’s so touching to see that instinct in a child!’ Then Violet would become still more touching” (44). 人形がその贈与先の女の子に向けて最も強く発信する教育的信号は「母性」である。人形を自分の子供に見立て、母親の模倣に集中させる。そ

の行為には社会的自立への関心から永遠に目を背けさせる意図も込められていた。そしてなによりもその模倣のためには、まず母をお手本にしなければならない。客観的憧れの対象ではあっても永遠に相容れることのできない母の模倣をすること、またその意図に込められた社会的自立の夢を棄却することを、Stephen はどうしても受け入れることができなかったのだ。母親に憧れを抱く反面、母親の強要する女らしさや母性を受け入れられないことに苛立つ Stephen。女性に求められる「母性」等の素質自体の不条理さを何の疑いも抱かずに受け入れる Violet。彼女の思慮の無さに苛立つ Stephen は彼女を自分の最も嫌悪する人形に例え、こう憤慨する。“She had fat, wobbly legs too, just like a rag doll” (38).

過剰なまでの期待にさらされつつ、この世に産まれることになった Stephen。彼女は最初両親の Anna と Philip にとって、精神主体を注ぎ入れる器であり、Stephen 自身は自分の中に注ぎ入れられる女性にまつわる保守的な倫理を頑に拒絶し、そのプロトタイプである人形に対して激しい嫌悪感を抱いた。では、全ての自我を持つものが未意識のうちに自身を形成している精神主体とそれを受ける器の関係そのものについて、Stephen は拒絶をしていただろうか。答えは否である。

その後 Stephen は自らの理想をその身体で表現して行く。子供時代ずっと嫌っていたお仕着せのリボンの付いたカールの髪型をまず活動的なお下げに、そして母親と決別して Morton を離れたあとは髪を crop hair にする。服装も London に上京してからは男物のブレザーをあつらえて、男装に身を包む。それらの外的変化は決して彼女の精神主体に添って形成された訳ではない。彼女はその生涯の中、常にジェンダー的に不利な状況に立たされた時、男性に対して嫉妬に至るまでの強い憧れを持っていた。

Every instinct handed down by the men of her race, every decent instinct of courage, now rose to mock her so that all that was male in her make-up seemed to grow more aggressive, aggressive perhaps as

never before, because of this new frustration. . . . she was nothing but a freak abandoned on a kind of no-man's-land at this moment of splendid national endeavour. (271)

自分の性癖嗜好が母親に知られ、勘当された時点で、それまで強要されていた「女性らしさ」からの逸脱には成功したが、彼女のアイデンティティはその瞬間崩壊した。本能的に救済措置として次に入るべき器が必要となった。そこで選択したのが男装である。Stephen は確かに、他の性倒錯者よりも、男性性の芽生えが顕著であり、比較的ジェンダー的に自分の身の置き所を理解しやすい身分ではあったが、それでも、やはり男装という行為自体はコスチューム・プレイの延長線にある仮の処方である。男装の利便性もさることながら、自身を男の姿に当てはめないと気がすまなかった Stephen は、その行動自体は自発的であるものの、自分でも計り知れない精神主体を男装の器の中に押し込めなくてはならなかった姿は、皮肉なことに、かつて自分に押し付けられた人形と重なるのであった。

性的倒錯という当時世間には計り知ることのできなかった性質を現実の前にした戸惑いは、若き Sir Philip および Anna の最初にして一番の試練であった。Stephen、そして彼女の両親を含む Hall の支配する精神世界の中の登場人物は各自持っていた認識概念を常に他人に、自分にエゴイステックに強要し続けた。しかしそれは結果、各人に超えることのできない大きな心の壁を作ることになる。人形の概念は脆くも崩壊した、そしてレズビアンというアイデンティティの居場所がまだ当時確保されていなかった Stephen は、哀しくも器を手に入れるためにまたその崩壊した人形の陶片を拾わねばならなかったのである。 *The Well of Loneliness* の序盤には、それぞれ登場人物の過信と挫折と葛藤を、人形初めさまざまなアイテムがそのシンボルとなって、読者を導く。当時認知度の低かったレズビアニズムというセンセーショナルなテーマを扱ったこの作品がその概念を超えて、人々に広く受け入れられた理由の一つは、そんな Hall の、Joyce などによって確立された Symbolism の導入にもあったのだ。

引用文献

- Cline, Sally. *Radclyffe Hall: A Woman Called John*. London: John Murray, 1997.
- Hall, Radclyffe. *The Well of Loneliness*. London: Virago Press, 1982.
- Joyce, James. *A Portrait of the Artist as a Young Man*. London: Penguin Books Ltd, 2000.
- 小谷真理 「少女のためのファム・ファタール」『ユリイカ 5月号』第37巻第5号 (2005年5月): 116–127.
- KUJO. Home page. *Datsu-Ningyoron: Quit the Dispute of Doll*. Ed. Mori Motohiro. Aug. 2000. 10 Oct 2005  
〈<http://www.interq.or.jp/dragon/moriyado/book/huyuyama/yes/yes10.htm>〉.
- Lord, M. G. *Forever Barbie: The Unauthorized Biography of a Real Doll*. Glendale, CA: Diane Pub Co, 1994.
- Souhami, Diana. *The Trials of Radclyffe Hall*. London: Weidenfield & Nicolson, 1998.